下顎歯肉に発生した青色母斑の1例

井関 富雄・井関ゆかり・新垣 善啓
篠田 豊・白数力也・田中昭男*

A case of blue nevus arising in mandibular gingiva

Tomio ISEKI・Yukari ISEKI・Yoshihiro SHINGAKI
Yutaka SHINODA・Rikiya SHIRASU・Akio TANAKA*

Abstract: A blue nevus in the oral mucosa is an uncommon pigmented lesion originating from melanocyte, and a case of a blue nevus arising in the buccal gingiva of the canine area of the right mandible of a 10-year-old male is reported.

The slightly elevated lesion was a brownish black mass, measuring 10 mm in diameter, that was excised completely under local anesthesia.

Histologically, the pigmented mass consisted of spindle-shaped melanin-producing cells located in the deeper portion of the connective tissue. Ultrastructurally the cells revealed numerous melanomes in varying stages of development in the cytoplasm and basal lamina occasionally in their outer surfaces.

The postoperative course was favorable and there has been no recurrence.

Key words: blue nevus (青色母斑), gingiva (歯肉), ultrastructure (超微構造)

緒 言 症 例

色素性母斑はメラニン色素形成能を有する母斑細胞の増殖からなる色素細胞性良性腫瘍と考えられており、組織学的には接合性母斑、真皮内母斑、複合性母斑、さらに特殊型として青色母斑および若年性黒色腫に分類されている。これら色素性母斑は通常皮膚にみられ、口腔粘膜に発生することは比較のまれとされている。なかでも本邦において青色母斑に関する詳細な報告は認められない。

今回わたしたちは、下顎歯肉に発生した青色母斑の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

患 者：10歳 男児。

初 診：昭和63年8月

主 訴：右側下顎犬歯部頬側歯肉腫瘍。

現病歴：3歳頃より右側下顎前歯部頬側歯肉に黒褐色の色素沈着を伴う小腫瘍を認めたが、疼痛などの自覚症状はなく放置していた。しかし、昭和62年6月頃より腫瘍が徐々に増大してきたため、昭和63年8月初旬某歯科を受診し、精査のため当科を紹介され来院した。

既往歴・家族歴：特記事項なし。

現 症

全身所見：体格は中等度、栄養状態は良好で特に異常所見は認められなかった。

口腔内所見：右側下顎犬歯部頬側歯肉に境界明瞭な黒褐色の色素沈着を伴う5×10mmの腫瘍が認められた(写真1)。腫瘍の被覆粘膜は正常で圧痛はなく、硬さは弾性硬であった。また、エックス線検査では同部に骨吸収像などの異常所見は認められなかった。

処置および経過：初診時の所見より臨床的に色素性母斑と診断し、局所麻酔下で周囲健康組織および骨膜を含め腫瘍を切除した(写真2, 3)。術後経過は良好で、

大阪歯科大学口腔外科学教室第1講座

(主任：白数力也教授)

* 大阪歯科大学口腔病理学教室

(主任：田中昭男教授)

First Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Osaka Dental University (Chief: Prof. Rikiya Shirasu)

* Department of Oral Pathology, Osaka Dental University (Chief: Prof. Akio Tanaka)

受付日：平成2年1月11日

写真 1 初診時口腔内所見

写真 4 病理組織所見 (H-E 染色, $\times 40$)

写真 2 摘出物所見

写真 5 病理組織所見 (H-E 染色 $\times 200$)

写真 3 摘出物の剖面

上皮下結合組織内に黒色の色素沈着が認められる

写真 6 病理組織所見 (マッソン染色, $\times 40$)

現在までのところ再発は認められていない。

病理組織所見: H-E 染色標本では, 上皮表層では一部角化が亢進し, 上皮突起は軽度延長し粘膜下結合組織の中層から深層にかけて色素顆粒を有する細胞が増殖していた (写真 4)。色素顆粒を有する細胞は主に紡錘形

の扁平な形態を示し, 時に立方形あるいは類円形を呈した (写真 5)。なお, 核分裂像や異型性などの悪性所見は認められなかった。

マッソン染色では色素顆粒が黒染し, メラニン色素を含むことが確認できた (写真 6)。

電顕的観察では, 母斑細胞の外形は類円形のものや細長いものなど多様であり, 樹枝状の細胞質突起を有するものが多く認められた (写真 7)。また胞体内に多数のメラノソームおよび, 一部には未成熟なメラノソームで

写真 7 電子顕微鏡所見 (×6,400)
多数のメラノソームを含む母斑細胞

写真 10 電子顕微鏡所見 (×4,600)

NC: 母斑細胞

MP: メラノファージ

写真 8 電子顕微鏡所見 (×58,500)

PM: プレメラノソーム

写真 9 電子顕微鏡所見 (×25,200)

BL: 基底膜様構造物

MF: 微細線維

PV: 飲小胞

あるプレメラノソームが観察された(写真8)。細胞の表層には基底膜様構造物や多数の飲小胞がみられ、細胞質内には微細線維も認められた(写真9)。一方、塊状になった多数のメラノソームを含む類円形細胞も認められ、これらはメラノファージと考えられた(写真10)。

確定診断: 青色母斑。

考 察

色素性母斑はメラニン色素形成能を有する母斑細胞の過誤腫的な増殖物であり、組織学的には接合性母斑、真皮内母斑、複合性母斑、さらに特殊型として青色母斑および若年性黒色腫に分類されている¹⁾。これら色素性母斑は皮膚にみられることが多く、口腔粘膜に発生することは比較的まれといわれている。口腔粘膜の色素性母斑の本邦報告例は、山崎ら²⁾によれば18例で、そのうち真皮内母斑が13例と最も多く、青色母斑はわずか1例のみであった。海外では Buchner ら³⁾が文献報告例を含めた191例の色素性母斑について詳細に検索し、青色母斑は61例(32%)と頻度が高く、本邦とはかなり異なった結果を得ている。

口腔内に発生した青色母斑は、単発性で軽度膨隆した青～青褐色を呈する無症候性の色素斑として認められることが多いといわれている³⁻⁵⁾。大きさに関しては、最大径が1cm未満の小型のものがほとんどで、Buchner ら³⁾は平均0.44cmであったと報告している。発生部位としては硬口蓋が最も多く、次いで頬粘膜や口唇にみられるが、歯肉に発生することはきわめてまれである³⁾。本症例の場合、下顎歯肉に発生し、最大径が1cmと大型であったところから臨床的に興味深い症例であると思われる。

青色母斑は、組織学的に真皮メラノサイトが腫瘍性に増殖する良性真皮メラノサイトーマと考えられており、

普通型青色母斑 (common blue nevus), 異型青色母斑 (atypical blue nevus), 細胞増殖性青色母斑 (cellular blue nevus) および悪性青色母斑 (malignant blue nevus) に細分されている⁶⁾。口腔内に発生した青色母斑の場合, その大部分は普通型青色母斑であり, 異型青色母斑と考えられるものはわずか3例³⁾で, さらに細胞増殖型および悪性青色母斑は全く報告されていない。本症例では粘膜下結合組織の中層にメラニン顆粒を豊富に含む紡錘形細胞の集塊が認められ, 典型的な普通型青色母斑の像を呈していた。

皮膚科領域では青色母斑の超微構造的特徴として①一般的に胞体は細長い, ②大型の多数の成熟メラノソームを含むプレメラノソームがみられる, ③基底膜様構造が細胞膜周辺にしばしば認められる, ④メラノソームの自己崩壊像がみられる, ことなどがあげられている⁷⁾。口腔内に発生した青色母斑の電顕的観察^{8,9)}でも上記の皮膚科領域のものと類似した所見が得られている。しかし, 口腔内に発生したものでは, それら以外に本症例においてもみられた細胞質内の微細線維や, 細胞表層に多数の飲小胞が存在することの特徴としてあげている。これらは口腔領域に発生したものに特異的な所見であるとは言及できないが, 今後さらに検索する必要があると思われる。

青色母斑の治療に際しては, 組織型に応じた対応が必要となる。本症例のような普通型青色母斑の場合, 発育は緩慢で悪性化することはない⁹⁾といわれている。しかし, リンパ節転移をきたしたとの報告¹⁰⁾もあり, 他の色素性病変と鑑別する必要もあるので, 周囲健康組織を含めて切除し, 組織学的検索を行うべきであると考えられる。

結 語

10歳男児の下顎歯肉に発生した青色母斑の1例を経験し, 超微構造的検索を行うとともに若干の文献的考察を加え, その概要を報告した。

本論文の要旨は, 第17回日本口腔外科学会近畿地方会(昭和63年12月10日, 大阪)において発表した。

引 用 文 献

- 1) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理学Ⅱ, 改訂版, 永末書店, 京都, 1982, 594-597頁。
- 2) 山崎眞由美, 北村 豊, 他: 歯肉に発生した色素性母斑の1症例. 日口外誌 35: 1866-1889 1989.
- 3) Buchner, A., Hansen, L.S., et al.: Pigmented nevi of the oral mucosa: A clinicopathologic study of 36 new cases and review of 155 cases from the literature. Part II: Analysis of 191 cases Oral Surg 63: 676-682 1987.
- 4) Hasse, C.D., Zoutendam, G.L., et al.: Intraoral blue (Jadasson-Tieche) nevus. Oral Surg 45: 755-761 1978.
- 5) Papanicolou, S.J., Pierrakou, E.D., et al.: Intraoral blue nevus. J Oral Med 40: 32-35 1985.
- 6) 井上勝平, 桑原宏始, 他: 真皮メラノサイト系母斑—蒙古斑, 太田母斑, 青色母斑などの臨床—, 皮膚臨床 16: 747-768 1974.
- 7) 山村雄一, 久木田 淳, 他: 現代皮膚科学大系 11メラノサイト系腫瘍. 母斑, 母斑症. 第1版, 中山書店, 東京, 1982, 115-120頁。
- 8) Kjaerheim, A., Martinez, M.G., et al.: Blue nevus of the oral cavity. An electron microscopic study. Oral Surg 29: 718-728 1970.
- 9) Lovas, G.L., Wysoki, G.P., et al.: The oral blue nevus: Histogenetic implication of its ultrastructural features. Oral Surg 55: 145-150 1983.
- 10) Gricouroff, G., Mazabraud, A., et al.: A propos d'un cas de naevus bleu avec envahissement ganglionnaire: Bull Cancer 61: 137-150 1974.